資料渉猟余話

その144

戦時体制下の「アトリエ」上

～藤本韶三が編んだ美術雑誌～

村澤　聡

美術雑誌にも歴史がある。今のようにマスメディアやSNSの情報がない時代、作画に取り組む人たちにとっては美術雑誌こそが何よりの情報源だった。プロもアマチュアも含めて貪るように雑誌情報に食い入ったであろう。

＊

明治38（1905）年創刊の月刊誌「みづゑ」はその草分けだ。当初は水彩画ブームを反映した内容だったが、大正モダニズムの時代には美術一般の情報を扱うようになる。

文芸同人誌「白樺」（明治43年創刊）は、大正期に入ると文学のみならず西洋の美術情報を率先して取り入れる。この「白樺」が、文士や芸術家志望に与えた影響も大きい。

同じ大正期に「中央美術」「アトリエ」といった総合美術誌が刊行され競合の活気を呈した。表題にある月刊美術雑誌「アトリエ」の創刊は大正13（24）年。版画家・洋画家で教育者でもあった山本鼎（1882～1946）と、その義弟・北原義雄によりアトリエ社から企画出版された。

鼎の妻は友人の詩人・北原白秋の妹、家子。白秋にはもう一人、出版業を営む弟、鉄雄がいて芸術雑誌や写真雑誌を刊行している。2人の弟の出版事業に当然、白秋や鼎の意向が反映したことは想像できる。

＊

「アトリエ」には創刊時から、飯田市松尾出身の美術ジャーナリスト・藤本韶三（1896～1992年）が関わっていた。写真家・藤本四八（1911～2006年）の実兄である。

韶三は飯田中学中退後、画家を目指して上京。写真製版印刷の会社に勤務する傍ら白馬会系の洋画研究所で黒田清輝に師事した。後に川端龍子や山本鼎の指導を受けるが、農民美術研究所の仕事に参加することで鼎との関係は深まっていく。

雑誌「アトリエ」の仕事も当然、鼎の勧誘に始まった。開始号は不明だが、昭和14（39）年まで韶三は同誌の編集長を務めている（東京文化財研究所資料）。その後、「アトリエ」は雑誌統制により休刊。戦後、北原兄弟の手で復刊を遂げる。

現存する戦前の美術雑誌「アトリエ」は希少。国立国会図書館でも、収蔵本はほぼ戦後のものに限られる。そんな折、戦前の「アトリエ」が南信州地域資料センターに持ち込まれた。

韶三が編集長時代だった昭和13（38）年1月から翌年3月にかけての号（欠損あり）で、臨時増刊号3冊も含め計13冊が収蔵された。

戦前の「アトリエ」

卓上メモ
藤本韶三
愛宕山の裏、西久保の通りの櫻並木の花は盛開で、チラホラと頃望に白い斑點を見せ、十三三夜か満月も近い月が良祭の中空にかゝつて、湯屋のらしい煙突の煙は蒼眞ぐに、月の光をうけて立ち昇つてゐた。空居の背景のやうな最他で昇つた。もう二十年近い昔の或る春宵の印象で、雨樹の洋画研究所で、黒田清輝先生から「この絵は杓子定のやうにでレやんこぢやないか」と手ひどくやられヂッサンの訓服を着てゐた頃の話である。この頃、高工の訓服を着てゐた頃の話である。西田庄司君と、製麻たるこの裁色の中を、二百種一に出たロダンの首の話をして歩いた西だ。
春になると下黒瀬にこの静かな春宵の印象が何よりも先に思ひ出されるのである。その後あんな先に思ひ出されるのであるが、その後あんな静かな、あんな感じの春らしい夜に、もう一度出會はないものかと何度も春を迎へて来たが、それ限りめぐり會はない。すると、この美しい印象に年月が重なるにつれて、いよいよ美しく美化されて来るやうである。
その後間もなく友人、見た双傷事件、これは暗い夜だつたが、最近者の若い女が、電車道から一寸引込んだ露路に倒れ、時々、昔を札まで通る電車の明りが、微きにした人への間から、チラと射す度に、淡色の荒紙を染めた血の色が強く眼を刺戟した。この時も様の花片が、その繰りに散り敷かれてゐた。これなども月日と共に、若匠朗の製蒸面のやうに思はれて、美しい方に絵つて来る。
時間の翼の後方に過ぎ去つた事を思ふからかも知れぬが、明治末から大正にかけて日本の國情にしても、國際關係にしても、まことに変事だつたと思ふ。こゝで日本の美術が、後世の美術史の上に、如何なる地位を占むるかは知らずとするも、現に角一つ瓏進したのは、美術といふものの時代に左右される事が、多く大きいことを思ふ。然し、今後の美術は泰平の絵模を受けて進展するものでなく、緊迫した國情の中なれば、その中にあつて、その國情と共に進展しなければならない。國なり、世界の情勢に別問になつては、何の進歩も期待まれまいし、時代の惡術も生れない。
私の家の庭に、二十数本の櫻があつたが、庭の枝沿で絵植した時に五六本枯らして終つた。接又が変年に枯つて無めたものださうで、野生の櫻や、墓地櫻もある。若木であるが、八重櫻が多く、四月末頃になると、雪の美しさから、國間の蕾眼、北雪秋から重梢と垂しまそてくれ

韶三のコラム「卓上メモ」